

分裂する語り

『西山物語』の構想

一 はじめに

『西山物語』の冒頭「こがねの巻」において、主人公大森七郎の家族構成は以下のように述べられている。

妻ははやくなくなりて、老いたる母のおはするを、家は貧しけれど、みたりの子してともかくにもかしづきまゐらせける。

ここに出る「かしづく」という語には「竹取物語 大切に仕ふる也」と出典注がついているが、これについて現在唯一の注釈である高田衛注では「竹取物語」の「かしづく」の用例不詳^{〔一〕}としている。しかし『竹取物語』正保三年刊本（以下、正保刊本）を見ると、

三月はかりになる程に、よきほどなる人になりぬれば、かみあけなとさうして、かみあけさせ、きちやうの内よりも出さす、いつきかしつき、やしなふ程に、此ちこのかたちのけそうなる事、世になく^{〔二〕}

右のように「かしつく」という語が載っているのである。この箇所

紅 林 健 志

は、現行『竹取物語』の底本として用いられることの多い古活字十行本などでは、

三月はかりになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪あけなとさうして、かみあけさせ、もきす、ちやうのうちよりも出さす、いつきやしなふ、此児のかたちの、けそうなること、世になく

（古活字十行本）

となつてゐる。このように流布本文による限り、高田注のいうように「かしつく」という語については、「用例不詳」というしかないのであるが、どうやら、作者は、『西山物語』では流布本文でなく正保刊本を用いたと推測される。『西山物語』には『竹取』を出典と明記されている用例が「おほぬす人かな（竹取に大ぬす人のやつがとも書り）」「のけさま（竹取物語）」「しろめがちになり（竹取物語）」と他に三例出る（括弧内が注の内容）が、いずれも正保刊本では、「おほ盗人のやつか」「のけさまにおち給へり」「御目はしらめにて」とあり、この推測に矛盾しない。「しろめ」とあるのを「し

らめ」とすることに疑問なしとはしないが、管見の範囲内では、「白目」や「しろめ」と表記する本はない。この三例、正保刊本と流布本文の間に異同はなく、他の諸本を見ても、基本的に違いはない。加えて、「かしつく」を本文にもつものは正保刊本以外には見当たらない^③。このように、正保刊本が他の諸本に対してはるかに優位にあることは疑いなく、作者の用いた『竹取物語』は正保刊本であると確定していいと思われる。

これは些末な注釈的問題にすぎないが、このように、作者の用いたテキストの確定など、近世における典拠のあり方を問い直していく作業は、『西山物語』研究に新たな展望を与えてくれるであろう。それは以下にとりあげる『太平記』との関係についてもまた同様である。

いわゆる源太騒動という実説が背景にあるため、従来の『西山物語』（建部綾足作、明和五年刊）研究では、素材として用いられている先行の文学作品について詳細な検討が加えられることはなかった。本稿ではこうした研究史をふまえつつ、従来あまり顧みられてこなかった『太平記』巻二十三「大森彦七事」に着目し、近世におけるその受容のあり方を参照しつつ、素材と作品との関係についていくつかの知見を付け加えたい。そして、そこを端緒として『西山物語』全体の構想について論じてゆきたいと思う。

二 大森彦七譚の位相

先にも述べたように、『西山物語』の主人公、大森七郎は『太平

記』巻二十三「大森彦七事」に登場する大森彦七の子孫として設定されている。しかし、そもそもなぜ大森彦七なのか、という問いかけが先行研究ではなされていない。もちろんこの問題は、モデルの渡辺源太が渡辺綱の子孫とされる人物であり^④、また「大森彦七事」で彦七が鬼女と遭遇する場面は、綱が一条戻り橋で同じく鬼女と相見えた一件に酷似しており、この綱と彦七の類似が源太から七郎へ、という発想を生み出す源泉となった。——このように簡単に整理することが可能である。しかし、この大森彦七譚の近世における受容を媒介とすることで、大森彦七の子孫という設定にもうひとつ別の理由があることも見えてくる。

『西山物語』は大森七郎が彦七の代より伝わる太刀を、奉納されていた御寺から取り戻すところから幕を開ける。この太刀の呪いが物語を律してゆくこととなるのだが、この彦七の太刀とは一体どのようなものであったのか。一度、本文を離れて、原話『太平記』を見てみるならば、その中では以下のように記されている^⑤。

正成彼ト共二天下ヲ覆サント謀ニ、貪嗔痴ノ三毒ヲ表シテ必三剣ヲ可用。我等大勢忿怒ノ悪眼ヲ開テ、刹那ニ大千界ヲ見ルニ、願フ処ノ剣適我朝ノ内ニ三アリ。其一ハ日吉大宮ニ有シヲ法味ニ替テ申給リヌ。今一ハ尊氏ノ許ニ有シヲ、寵愛ノ童ニ入り代テ乞取ヌ。今一ツハ御辺ノ只今腰ニ指タル刀也。不知哉、此刀ハ元暦ノ古へ、平家壇ノ浦ニテ亡シ時、悪七兵衛景清ガ海へ落シタリシヲ江豚ト云魚ガ吞テ、讃岐ノ宇多津ノ澳ニテ死ヌ。海底ニ沈デ已ニ百余年ヲ経テ後、漁夫ノ綱ニ被引テ御辺ノ許ヘ伝ヘタル刀也。所詮此刀ヲダニ、我等ガ物ト持ナラバ、尊氏ノ代

ヲ奪ハン事掌ノ内ナルベシ。

注目すべきは「悪七兵衛景清ガ海へ落シタ」という箇所、これについて長谷川端は「景清が刀を海に落としたという話は未詳。同合戦の時、三種の神器の一つである宝剣が海底に失われたことに基づく連想話か」と注している^⑥。三種の神器の宝剣、いわゆる草薙剣である。原話における彦七の太刀には草薙剣と一部分そのイメージが重なり合うところがあるといえる。長谷川の指摘を受けて、『太平記』と『平家物語』をつきあわせてみれば、『平家』剣の巻の「吾朝には、神代よりつたはれる靈剣三あり。十つかの剣、あまのはやきりの剣、草なぎの剣これ也」^⑦との記述と、『太平記』の「貪瞋痴ノ三毒ヲ表シテ必三劔ヲ可用。我等大勢忿怒ノ悪眼ヲ開テ、刹那二大千界ヲ見ルニ、願フ処ノ劔適我朝ノ内ニ三アリ」という設定の類似も指摘できる。このように原話における彦七の太刀は、聖性と魔性といった表裏の関係にはあるものの、そのイメージは草薙剣といくつかの点で重なり合うのである。

この類似が近世における大森彦七を扱った浄瑠璃に積極的に取り入れられてゆく。その過程で、類似はより強く意識されていったはずである。

まず、近松門左衛門作、宝永七年初演の『吉野都女楠』^⑧を検討しておく。この作品において、悪役として登場する大森彦七は、「三種の神宝」のひとつである宝剣に首を刺し貫かれて息絶える。

無道の盛長ちつ共恐れず。よし／＼さはらぬ神にたゝりなし。
心をかけし女をつれてかへる計に。ばちもたゝりも有べきかと
走りよつて内侍をひつ立んとする所に。杉にかけたる宝剣のさ

やをはなれてやひばの光り。天にかゝやき地になり渡り盛長がかうべの上。ひらめきかゝり追廻し／＼。つるぎのはかぜ神風のにぐるをおふてちはやふるいがきもこへて逃て行。(中略)有がたくも宝剣は盛長が首をさしつらぬき。こくうにひらめきかへらせ給ひ。もとのさやに納りしは有がた。かりける次也

(第五)

宝剣がひとりでに飛び上がる趣向は原話における、彦七が化物と格闘のすえ、宝剣を奪われてしまった後の一場面、

角テ夜少シ深テ、有明ノ月中門ニ差入タルニ、簾ヲ高く捲上テ、庭ヲ見出シタレバ、空ヨリ毬ノ如クナル物光テ、叢ノ中へソ落タリケル。何ヤラント走出テ見レバ、先ニ盛長ニ推碎カレタリツル首ノ半残タルニ、件ノ刀自拔テ、柄口マデ突貫テゾ落タリケル。不思議ナリト云モ疎カ也。

に拠つたものと考えられる。彦七の太刀と草薙剣との類似が作者の念頭にあったことは間違いない。ただ、この作品は原話から離れて自由に創作されており、彦七の太刀と草薙剣との類似を論じるための例として、少々迂遠に過ぎるかもしれないので、ひとつの傍証としてここに挙げるにとどめておく。

次に、『車還合戦桜』(文耕堂作、享保十八年初演)を紹介する。この作品では、彦七の太刀と草薙剣との類似がまさにその構想の核として用いられている^⑨。

本其太刀は先帝後醍醐の天皇、神代の宝剣と等しく、日の御座に立られし名剣

(初段)

先帝を始新田楠亡した、大功有某は、宰相より漸大納言に転任、功もない尊氏は征夷大將軍、官祿共にばつくんのちがひ、ちびくしたる官位より一飛に王位の望み、彼の太刀を宝劍の替りとし、内侍所のかはりには、紀州日前宮の神鏡、二の宝を拵へ置、王位に即は此清忠、神璽、宝劍、内侍所、ふ足のない上分別

(初段)

將軍尊氏大森彦七を召具ししづくとかけ付給ひ、ヤアく清忠、汝日前宮の神鏡を内侍所とあがめ、盛長が太刀を宝劍に擬へ、王位をくつがへし奪はんとの謀反

(五段)

初段の引用は坊門宰相清忠の科白である。彦七の太刀を草薙劍の代わりして王位を狙おうとする清忠と、それを渡すまいとする彦七の駆け引きがこの作品のストーリーの中核をなしている。そこから、二つの太刀のイメージが代替可能な程接近していることが見てとれる。

『蘭奢待新田系図』（近松半二・竹田平七・竹本三郎兵衛合作、明和二年初演）でも同様のことが確認できる¹⁰⁾。

「(前略)又此上にも思ひ置事さらくくないサア早ふ殺してく」と。首差し延す健気さを。見る目の中も。いと猶くらむ心を漸と。太刀拔放しふり上れば。「うん」と計にたをる、娘。

「ヤア何と仕やつた」と。ふしぎに劍打守り。「ム、此太刀の作りは諸刃。尋常ならぬ此劍を。ふり上れば娘が悶絶。ハテあやしや」といふ声に。宮（引用者注 大塔宮）もふしぎの御顔ば

せ。「其太刀是へ」と御手に取。「ハア有がたや忝なや。是こそは此日比尋求る十握の御劍。今はからずも我手に入は。再び九五（引用者注「天子の位。また、最高の位」）に帰るべき其瑞相にて有けるか」と。押戴きく御悦びは浅からず。

(第四)

大塔宮の存在が敵方に知られるのを防ぐために自らの命を犠牲にしようとする娘。母がその娘の首を斬ろうとしたとき、異変が起こる。大塔宮が太刀を検めると、それが「十握の御劍」であることが明らかになる。太刀を手に入れることが、「九五の位」——ここでは皇位を指すのであろう——に帰ることにつながる、というこの詞章も草薙劍を意識した表現と考えるとよいだろう。また「十握の御劍」という名称も、『太平記』卷二十五「自伊勢進宝劍事」に、

依之草薙ノ劍トハ申也。此劍未大蛇ノ尾ノ中ニ有シ程、鉞ノ河上ニ雲懸リテ、天更ニ不晴シカバ、天ノ群雲ノ劍トモ名付ク。其尺僅二十束ナレバ又十束ノ劍トモ名付タリ。

とあるように、草薙劍の異称として「十束の劍」（天正本『太平記』では「十握劍」と表記されている）とあるのに拠ったものと見ることができる。

以上、近世における大森彦七譚の受容を、彦七の太刀の描かれ方に絞って見てきた。近世において、彦七の太刀と草薙劍との類似が強く意識されていたこと、そしてまたそれが繰り返し用いられていることは注目されている。作者が太刀にまつわる怪異を発端として『西山物語』を綴りはじめたとき、この類似が念頭にあった可能性は十分にある。確かに文辞の上では、

さて七郎がはける太刀は、楠正成のぬし、津の国みなと川にて軍破れてうせたまひし時、血つきたるつるぎの太刀のはべりしを、彦七とり帰りに我が家に残しおきけるが、そのはつこなれば、今このいへにとどまりて、世にふたつなきつるぎなりとぞいひつたへける。

と、このように原話にあった、草薙剣と相似た側面は捨象されてしまふ。何故それを捨象したかについては、いくつか要因があるうが、先行する浄瑠璃作品が、権力争いの道具として太刀を用いているのに対し、『西山物語』では、いわば七郎の生き方の象徴として太刀を使っているという差異が、この草薙剣との類似を取り込む／捨象するの差異となつて現れてきているといった、構成上の要請による部分が大きいのではないだろうか。

ただ、院主の科白には、

つるぎは正成ぬしのはき給へる太刀なり。此のひとぞあめが下武士のかがみとは申すならずや。さる人のはかせたまへる物なれば、くさなぎの剣にもたぐふべく此のあるじはおもひをれり。

ともあるので、ここで、捨象というのは、権力争いの道具としての機能を捨てられたにすぎないのであつて、草薙剣との類似によつて彦七の太刀が持っていたであろう象徴的な機能は、むしろ依然として残されていると見るべきである。そしてその象徴的な機能こそが、作者をして、彦七の太刀の物語として『西山物語』を構想せしめたその要因と見ていい。

作者の次作、『本朝水滸伝』（安永二年刊）において、拡散してゆくこととする表層のストーリーと趣向群を裏側から規制する、一種の

求心力として〈倭建命モチーフ〉の存在を指摘したのは、長島弘明であつた¹⁾。さらに長島は一步踏み込んで「綾足の片歌・国学・物語」という位相の異なる領域を貫通する同一のモチーフ²⁾としてこの〈倭建命モチーフ〉を位置づけている。こうした長島のすぐれた読みを承けて、『西山物語』もまた〈倭建命モチーフ〉に連なる作品として位置づけてみようというのが本稿のねらいの一つである。ただ、『西山物語』の場合、『本朝水滸伝』のように直接的にストーリーに関わるものとしてこのモチーフが出てくるわけではない。それはたつきについては、なお、説明が必要である。

『西山物語』の場合、〈倭建命モチーフ〉は主人公の形象に深く関わるものとして存在する。大森七郎に用いられる「ますらを」という形容は、楠正成を経由して倭建命まで溯行可能なイメージなのである。その媒介となるものが、彦七の太刀であり、そうした「ますらを」像の提示のために『西山物語』は大森彦七譚を重要な素材として構想されねばならなかつたのである。

三 「ますらを」の形象

では、その「ますらを」の形象はどのように展開していったのか、以下具体的に見てゆくこととする。大森七郎は「此七郎ぞもののみちをみがきて、今の世のますらををひとにも称らるる男にてなむあれば」と評される人物である。この表現の背後には「ますらを」という言葉に象徴される精神のあり方が、今は喪われた時代であるという含みを読み取ることができる。『西山物語』は、この喪われ

た「ますらを」性の回復の物語である¹²。これは七郎にとって言えば、あるべき自己像の回復の物語と言い換えることも可能である。そして、このあるべき自己像を取り戻そうとしたことで、かえって七郎は秩序の側から放逐されてしまう。「こがねの巻」における宝剣奪取や、また「太刀の巻」における剣術試合の結末などがそれである。

七郎つとたちて、彼の太刀をこめおきたりし金戸をやぶり、袋ながらひき出だして、「もとより是は我がたからなり。今こそ持かへるなれ」とて、ときあしを出してにげ出でける

(こがねの巻)

さて八郎、七郎にむかひていひけるやうは、「その太刀たわやすく折れつるうへにてかてるは、誠のかちにあらず。今ひとわたり太刀をあらためて、出で給へ」となむ聞えければ、七郎こたへけるやうは、「さる事にあらず。勝つとまくるは唯、天の神のなし給ふ也。まだちもをるれば折るる時あり。けふのけぢめわたくしならずとおもへば、そのかち給ふにはまぎれなし。我かかるには長居せむはおもなし」といひつつ、折れたる太刀をひろひあつめて、あしをはやみにげいでければ、「見所もなき太刀あはせにぞ有ける」とて来し人もほいなげになむあかれちりけり。

(太刀の巻)

このように、七郎は常に秩序の側から「にげる」人物として描かれている。それはもちろん院主に対するふてぶてしい嘲笑であり、また、剣術試合の勝ちを八郎にわざと譲つたことへの韜晦でもあるの

だが、それは逃走であるがゆえに秩序の側にいることのできない敗北の謂にもなつてしまうのである。この関係が「露の巻」から「ほきの巻」へと到る一連の事件を経て、逆転してゆく。「露の巻」で、妹を殺した七郎は逃亡をしない。「此のうへは始をはり、うたへの御にはに申さむ」と出てける」と自らの行為を、世間の論理のうちに置こうとする。その七郎の行為に対して、「おのれは沓もはかで、そこはかとなくにげ出し」と「にげる」側にまわるのは、西山の僧都である。彼が俗世間の代表者として、「こがねの巻」の院主と同じ役割を担わされていることは明白である。秩序の側にいる人物の位置の、逆転するさまを描くために、この挿話はここに挟み込まれている。そして「ほきの巻」において、

されば七郎がかくれたりしひかり、終にのぼる日のごとくなりしかば、西ひがし北みなみの国の守より、「われ家の子にせむ」「かれおもと人にせむ」と、馬をはせ、車をのぼせてむかへたまひしかど、七郎かつてうけひかざりしかば、「しからば母をやしなひ奉るべき料に」とて、をちこちの国の守より、こがね・しろがね・太刀・まき物まで、よき使をもて、おくりたうびしほどに、今はならびなきさひはひの人となりて、その子うまごまでも、ゆたけくとみさかえ侍りしとかや。

と太刀を取り返す以前、「さるけちどもも聞えず、家もとみさかえて、ある大宅のいへのことなりてときめきける」状態に戻る。「ますらを」性というあるべき自己を回復した七郎が、秩序の側から受け入れられ、その社会的地位の回復も達成するというのが、『西山物語』において大森七郎のたどる軌跡である。「ますらを」性と、

社会的地位と、二重の意味で『西山物語』は自己回復の物語なのである。太刀を取り返すことで幕を開けるのは、物語を怪異で彩るためばかりではない。その「とりかえす」身振りに、自己回復の物語であることのひとつの宣言を読み取るべきだろう。その宣言の背後に、同化すべき自己像として倭建命が、設定されていることは先に述べたとおりである。こうした自己回復の物語という図式の中で、〈倭建命モチーフ〉の重要性は再確認することができる。¹³⁾

四 語りの分裂

先に「ますらを」性の回復、と述べたが、『西山物語』は単純な「ますらを」賛美の構造を有しているわけではない。そのことは既に奥野美友紀に指摘がある¹⁴⁾。

七郎と八郎に、「ますらを」としてふさわしい形象と語彙が与えられていることは先に述べたとおりであるが、かへ・宇須美のふたりは（厳密に言うなら老母も）それとは異なる。「みやび」の側になっっている。「要語」を参照して和文和歌の学習をしているような、『西山』の読者として想定されているような人びとと立場を同じくしているともいえよう。

ここではこの奥野の指摘を基礎としつつ、「ますらを」と「みやび」の側の関係性について論じてゆく。まず取り上げたいのは、「露の巻」における全編のクライマックスともいえるべき、七郎の妹斬殺のくだりである。

七郎いろをかへて、「かくことわりにあたる事もいなみたまふ

からは、いづれの耳にいづれの口をもてわいだめきこえ申さむ。そこ既にかためまいらせし事あり。よも忘れ給はじ。又我が太刀のゆくりなく折れたりし事をば、何とかみ給ひき。そはいふべからず。こと更宇須美ぬしはひとり子におはせり。かへまた我がひとりのもとなり。いきとしいけるもの、あはれみのころなからむや。此のうへはたとへことわりなき事なりともめぐしとおもふ心ひとつをもて、よろづうけひきたうべかし。七郎かく腰をりて申すからは、此のうへはひとことの御答へによりて、かへもいきてはかへらふまじけれ。さる驕も出で来ば、その御ためにもよからじ。ころをひそめて答へたまへ。うけ給はらむ」と聞ゆるに、八郎かしらを打ふりて、「おのれさきに何ごとをきこえおきつるか。事のしげきに打わすれ侍る。あなかしましのことや。いつまでのたまふともうけひくまじ」といひすて、其のむしろをたたむと見るを見て、かへも今は

とおもふけしきみえければ、「いでや八郎よ、そこにありて此のますらをがふるまふ事を見たまへや」と、をたけびにたけびながら、かへが衣のえりひしとつかみ、ひきよせてのけさまにおさへ、太刀をぬきてたかむなさかをさす。

ここで問題としたいのは、「かへも今はとおもふけしきみえければ」という一節である。ここから読み取れるのは、七郎の行為がかへとの同意の上になされた、ということである。しかし、この後、残された恋人、宇須美の前に顕れるかへ亡霊の語る死の場面は、この一節との間に微妙な齟齬を感じさせる。

「さればよ。今住みてはべる国は、けがらひのみおほくて、人

のたよりとてはなきところなれば、心のほかにへだたりまゐらせしぞ。」「さるところへは、何しにまゐりたまひつる」ときこゆれば、しばしさめざめと打泣きて、「御あたりをはなれて、何のころをもてかまゐるべき。兄なりける七郎、わがむねをとらへて何事も願はかなはず。はやくまかむでよと、氷なすつるぎをぬきて、我を追ひはなつほどに、さかしまになるとおほえしが、いと闇き国に出でつる。

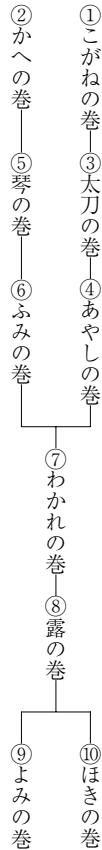
「心のほかに」「御あたりをはなれて、何のころをもてかまゐるべき」そう繰り返すかへの言葉は、覚悟の死を受け入れた者のそれではなく、その意志を踏みにじられた無辜の被害者のもののようだ。

なぜこのような齟齬が生じるのか、それについては、「露の巻」におけるかへ斬殺場面が、七郎の側から語られているため、と考えるほかはない。そこには七郎にとって都合のいい解釈が含まれているのである。そしてその語りの欺瞞は、亡霊の語りによってあばかれ、「いでや八郎よ、そこにありて此ますらをがふるまふ事を見たまへや」というように、ますらをの行為としてあつた妹殺しは、他ならぬ妹自身によって痛烈に批判される。「氷なすつるぎ」と残酷なイメージを使っている事実から、かへが「ますらを」の振る舞いに対して、肯定的な評価を下していないことがよくわかる。ここに「みやび」の側と「ますらを」の側の論理に大きな食い違いがあることを見てとることができる。また「ほきの巻」では、

さて八郎はこがね千ひらを出して、寺をたて経をさめ、なき人のおくつきには、石をたたみ珠をちりばめ、そがうへに飢こごえたるものには、よねをあたへ布をあたへ、ためしなき御の

りを尽しける。此の故にや宇須美やまひおこたりはて、すがすがしくなりにけり。

とある。「よみの巻」で、愛する人を失った宇須美の悲嘆を見てきた読者は、この結末に違和感を覚えざるを得ないだろう。このように「ほきの巻」が「かへの死を置き去りに」¹⁵している理由のひとつとして、この「ほきの巻」の語りが七郎、八郎の「ますらを」の側からの語りである、ということは言い得ると思う。そのため、語りは「みやび」の側に属する宇須美の心情によりそうかたちで病の回復を語らない。「此の故にや」と、八郎の側から、八郎の行為との関係という文脈でしか宇須美の病気の平癒を語ることができない。それが「ほきの巻」の語りの特色である。このように、『西山物語』では「ますらを」の側と、「みやび」の側が、それぞれ拮抗するかたちで描かれており、お互いがお互いを一種、相対化しあう構造になっている。妹を殺した大森七郎の行為は妹のかへ自身の側から、心ない残酷な行為としてとらえられ、また恋人を喪ったその悲嘆ゆえ、病に伏したはずの宇須美は、八郎の側からその心懷を無視した八郎の御法の結果という文脈で病の平癒を語られてしまう。この相対化の構造は「露の巻」、「よみの巻」、「ほきの巻」の關係に顕著だが、それは、そもそものはじめから『西山物語』の巻々に伏在していたのではなかったか。ここで試みに『西山物語』を「ますらを」の世界と「みやび」の世界とを巻に即して分類してみると以下のよう



それぞれの巻を、大森七郎、八郎の物語をその主な話題とするものと、かへ、宇須美の物語をその主な話題とするものとに分けると右のようになる。「こがねの巻」「太刀の巻」「あやしの巻」「わかれの巻」「露の巻」「ほきの巻」が、七郎、八郎の物語を扱う巻であり（こちらをA系と名づける）、「かへの巻」「琴の巻」「ふみの巻」「わかれの巻」「露の巻」「よみの巻」が、かへ、宇須美の物語を扱う巻である（こちらをB系とする）。「わかれの巻」「露の巻」は両方に属すると考える（なお、巻の頭についている数字は巻の順序を示す）。もちろん、『西山物語』はひとつの長編小説であり、A系、B系の片方だけあれば、成立するというように排他的に存在しているものではない。その意味でこうした分類が、少々乱暴であることは認めなければならないが、それでもこうして図式化することで、『西山物語』の論理構造はかなり明確になるはずである。

このように図式化した上で、俯瞰的に作品の展開を眺めたときに見えるのは、「こがねの巻」「太刀の巻」「あやしの巻」と続く、七郎、八郎の物語の展開に、「かへの巻」「琴の巻」「ふみの巻」の展開が従属するものとして位置づけられている、ということである。「こがねの巻」における宝剣奪取によって、老母は病に伏し、その看病のため宇須美はかへとひとつ屋根の下で過ごすこととなった、結果として二人はお互い親密の度を深めてゆくこととなる。さらに

「太刀の巻」における剣術試合前夜の盟約が、「琴の巻」における二人の同衾の背景をなしていることも指摘できる。また「あやしの巻」以降の展開を経て段々と疎遠になってゆく両家の関係に「ふみの巻」も支配されている。その結果、「わかれの巻」「露の巻」の破局がある。このように、一貫して従属関係にあったかへ、宇須美の物語が「よみの巻」に至り、七郎、八郎の物語に対して、それを相対化する痛烈な批判の牙をもつわけである。これはかへという七郎、八郎の自己回復の物語の犠牲となった被害者の視点からの語りを採用したためといえる。そこにはやはりこの少女への鎮魂の意図を読み取るべきであろう。

五 おわりに

本稿では、『西山物語』をあるべき自己の回復の物語として位置づけている。七郎、八郎の「ますらを」性の回復から、二人の社会的地位の回復へと到る道筋を、作者は源太騒動と呼ばれる実説をもとに構想した。そしてそれに加えて、『西山物語』には悲恋を主題としたかへ、宇須美の物語も編み込まれている。宇須美は七郎、八郎の物語の枠内で悲恋からの（回復）を要求された。その結果が「ほきの巻」として顕れたと考えることができる。

この自己回復の物語の中には、女主人公への居場所がない。彼女は終始、七郎、八郎の側の論理に左右され、あげく命まで奪われてしまう。そうした悲劇の女主人公への配慮として、彼女の視点からも眺める形で事件の再構成はなされたのではなかったか。そのためこのような二つの価値観の混在する複線構造の物語が作られた、と見るべきだろう。

とまれ、その結果として、事件は立体的に再構成されたといえる。七郎の行為を是ととるか非ととるか、それはむしろ読者の手にゆだねられているといつていい。

- (1) 中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳『新編日本古典文学全集78 英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』（小学館 一九九五年）本文の引用も同書に拠った。また出典注については適宜省略に従う。
- (2) 引用は、新井信之著『竹取物語の研究 本文篇』（図書出版株式会社 昭和一九九年）の翻刻による。古活字十行本も同。
- (3) 上坂信男編『九本対照竹取物語語彙索引』（笠間書院 昭和五五年）を用いて確認した。同書収録の諸本は、武藤本、古本、大秀本、吉田本、古活字十行本、正保刊本、武田本、内閣文庫本、竹物語。他、先に引用した該当の箇所は、前掲新井の著書に収録された、島原侯旧蔵本、蓬左文庫本、大覚寺本、前田本、戸川本にもあたっている。
- (4) 千坂和子「渡辺家と『西山物語』」（『大阪青山短大国文』六号 一九九〇年二月）にこれに関する資料が載る。この事実を作
- 者が知りえたかという問題が残るが、「渡辺」という名前の連想がもたらした、という形でもここでの論旨に大きな影響はないので、ひとまず置いておく。
- (5) 以下、『太平記』の引用はすべて『日本古典文学大系35太平記 二』（岩波書店 昭和三六年）による。
- (6) 長谷川端校注『新編日本古典文学全集56太平記③』（小学館 一九九七年）
- (7) 『新日本古典文学大系45平家物語下』（岩波書店 一九九三年）
- (8) 『近松全集 第六卷』（岩波書店 一九八七年）による。節記号などは省略した。
- (9) 東京芸術大学附属図書館蔵。所見は国文学研究資料館マイクロフィルムに拠った。
- (10) 引用は『叢書江戸文庫39近松半二淨瑠璃集「二」』（国書刊行会 一九九六年）による。これも節記号等は省略した。
- (11) 長島弘明『本朝水滸伝』の構想」（『日本文学』第三五巻八号 一九八六年八月）
- (12) 本稿の以下の論述は、稲田篤信「名分論の光景―『西山物語』考」（『江戸文学』二三号、二〇〇一年二月）の論旨、とりわけ「先祖の余殃により零落した七郎の名分は回復されたというのであろう」という結末のとらえ方に示唆をうけてものである。
- (13) 彦七の太刀は一見すると、悲劇の元凶のようにも見えるが、本文を子細に点検すれば、「しかれども楠のぬし惜しむ心や残したまひけむ」とあるように、怪事の原因は太刀そのもので

はなく、太刀に対する正成の執着の方にあり、太刀はむしろ最初から最後まで一貫して称賛の対象としておかれていることが見てとれる。

(14) 奥野美友紀『西山物語』と『歌文要語』（『都大論究』三二号 一九九四年六月）

(15) この文辞は長島弘明「建部綾足『西山物語』（『国文学』第三七卷九号 一九九二年八月）」「『西山物語』末尾の「ほきの巻」で、物語構成の常としても、一話が急激にハッピー・エンドに収束し、「宇須美やまひをこたりはて、すが／＼しくなりにけり」とあつて、かへの死を置き去りにするように物語が結ばれるところに、綾足の心の陰影を見るべきか否か」という評による。